

<研究論文>

保育者養成校における効果的な歌唱の教材研究

—保育園・幼稚園での音楽活動の現状に関する調査報告から見えてきたもの—

Research on teaching materials for effective singing in childcare teacher training schools

—Findings from a Survey Report on the Current State of Music Activities in Nursery Schools and Kindergartens—

山岸 多恵

Tae Yamagishi

キーワード:歌唱活動、音程、子どもの歌、わらべうた、手遊び歌

要旨

実習や実際の保育現場において、音楽活動を進めていく上で柔軟に対応できる音楽技能が保育者にも必要であると考え。保育者養成校の学生が、将来保育の現場に出て子どもたちと関わる際に、保育者養成校で学んだ専門的な知識や音楽に関する技能などを現場で活かすための有効的な教材を検討する。

保育現場でどのような音楽活動が行われているかアンケート調査を行ったところ、音楽活動においては歌唱（手遊び歌・わらべうたを含む）を伴う活動が多い結果となった。また、保育者養成校卒業後に期待する音楽技能について、歌唱指導・ピアノの技術・合奏指導法・編曲の方法・リトミック等が挙げられた。

アンケート調査結果を踏まえ、本研究では歌唱活動について保育者がどのような技術を身につけておかなければならないのかを考察する。限られた時間の中で、学生が効果的に技能を習得し、さらには自分自身で能力を高めることができる効果的な教材を提案したいと考える。

1. はじめに

幼稚園教育要領領域「表現」¹では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、表現豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と示されている。また、「ねらい」(2)には、「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。」、「内

容の取扱い」(3)には、「表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。」と示されている。

幼児の表現する楽しみや意欲を十分に引き出すためには環境や指導の見通しなど、保育者の援助や配慮が必要であり、幼稚園教育要領で示された「自分なりの表現」については突如表出されるものではなく、保育者の援助や関わりが重要ではないかと考える。

『幼稚園教育要領解説』第3節「教育課程の役割と編成等」の5「小学校教育との接続に当たっての留意事項」(1)「小学校以降の生活や学習の基盤の育成」²では、「幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにするものとする。」と示されている。

音楽に関して、小学校において音楽科へと自然に移行出来るように、また生涯教育となりうる可能性も含め、音楽に興味や関心が持てる工夫やこれらの見通しを持った音楽活動も保育の現場において肝要であると考えられる。

佐野ら(2019)³は、「聴覚は最も早くから育っており、お腹の中にいる頃からすでに、音は聞こえている。」と述べている。生後2週間までの新生児について、「この頃には、音声も単純な音として聞こえている。」と示し、「音を判別して認知し、言語として理解するには、6か月以上の経過が必要」であり、「次第に、強い音や特定の音等の記憶される音の種類が増し、音の理解や模倣、反復をする自己模倣期となる。」と述べている。

「音の理解や模倣、反復をする自己模倣期」であるこの時期に、音楽を軸とした観点から保育者の役割も重要ではないかと考える。そのため子どもが音を聴く行為について保育者の奏でる楽器の音、声や歌声も影響があるとも考えられる。

保育園・幼稚園での音楽活動の現状について2023年11月～12月に保育者の方々に行った以下に述べるアンケート調査では、年間を通して多く行われる音楽活動については歌唱を伴った活動(手遊び歌・わらべ歌を含む)が最も多いことが明らかとなった。

以上のことにより、保育者が子どもたちと音楽活動を行う際には、その楽曲に適したテンポや正しいリズム、歌唱を伴った活動(手遊び歌・わらべ歌を含む)においては加えて正しい音程で演奏や指導を行う必要があると考えられる。

Forrai Katalinら(1974)⁴は、「こどもの音楽的活動の第一歩は、うたうこと」と述べている。歌唱活動の伴奏となりうるピアノ演奏の技術も不可欠であるが、本研究においては、まず音楽の基礎となる「うたうこと」を軸とした保育者養成校での歌唱に関する効果的な教材を検討する。

2. 先行研究

保育園・幼稚園での音楽活動の現状について、本研究では京都府8校、大阪府3校、計11校を対象にアンケート調査を実施し、10校(回収率約90.9%)から回答を得た。他府県に

においては保育園・幼稚園・認定こども園でどのような音楽活動が行われているのだろうか。歌唱活動について以下のような先行研究が散見された。

加藤（2022）⁵は、保育現場における音楽表現活動について、静岡県内の公私立認定幼稚園・保育所・こども園を対象に「子どもの歌研究」のアンケート調査を行い歌唱の選曲について、「月案・週案などで決まってるうたう共通曲」「各保育園に任されている」という質問項目について歌唱の取り組みにおいては多くの園で保育者の自由性が高いと推察し報告している。

小澤（2009）⁶は、埼玉県・群馬県・栃木県・茨城県・新潟県等において、実習後の学生を対象にアンケート調査を行い、「生活の歌」や「季節の歌」など、日常的に歌われている楽曲が実習課題曲であることを示している。

高地ら（2022）⁷は、実習園において音楽活動実態調査を行い、レパトリーリストを作成している。実習園とのことで実施地域は東京都近郊であることが推測される。音楽活動では、「挨拶や生活の歌」「季節の歌」「行事の歌」やピアノなどの鍵盤楽器を使用しない「手遊び歌」「身体表現を伴った歌」が多く扱われていたことを報告している。

これらの先行研究からは、地域の特性やそれぞれの園独自の選曲も見られるが、保育園・幼稚園での音楽活動において「うた」が重要な位置にあることが見て取れる。

松下（2023）⁸は、保育士・幼稚園教諭養成のための大学授業での音楽基礎能力の向上において、音楽に関して保育現場で求められている課題やスキルを習得する効率的な方法を検討している。声楽指導について、「ストレッチ、腹式呼吸、発声練習を中心に自分の声を知ることで正しい音程、子どもに伝わる発語を習得」することと示し「コールユーブンゲンを用いた読譜課題も取り入れ」ながら指導していることを述べている。

以上の先行研究より、保育の現場での音楽活動において、保育者養成校で学習できる限られた時間の中で優先的に準備をしておく必要があると考えられる内容についての情報を得ることができた。

これらをもとに本研究において、歌唱指導についてピアノを用いずに子どもの声域に合わせた正しい音程で歌えることを目標とした教材を検討する。

3. 問題の所在と研究目的

『保育所保育指針解説』では、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりするなどする楽しさを味わう」⁹と示されている。解説には「保育士等などの大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、子どもが音楽に親しむようになる上で、重要な経験である。」と示されており、「子どもの様々な音楽に関わる活動を豊かにしていく」ために、保育者自身も子どもと一緒に音楽を楽しみ、音楽に興味関心を持つことも必要であると考えられる。

また、「ここで大切なことは、正しい発声や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではなく、子ども自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうこと」と示されている。

それでは、「子ども自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わう」ことができるためには、保育者はどのような援助やスキルが必要なのだろうか。

乳幼児保育研究会（2013）¹⁰において、「妊娠 24 週頃の赤ちゃんは、子宮の外から聞こえてくる音に反応するようになり」、「妊娠 28 週頃には、様々な音を認識し始める」ことが述べられている。

つまり、音遊びを通じて音を聴くという行為により幼児の「耳」が育まれていくとも考えられる。

佐野ら（2019）¹¹は、生後「3 か月頃からは、模倣行為は普段の生活において自分が興味を持った大人の発声やからだの動き、微笑など、ポジティブな感情を呼び起こすものを選択的に真似るという社会的な初期模倣となり、その後、生活のさまざまな場面で頻繁に現れるようになる。」と示し、「子どもの「表現」を豊かにするには、表現力豊かな大人が側にいることが重要」と述べている。つまり保育者も子どもに伝わりやすい発声で表現豊かに子どもと接することが期待される。

これらのことから「歌を歌う楽しさを味わう」ことについて、保育者はその楽曲に適したテンポ・正しいリズム・正しい音程を提示する必要があり、遊びの中から自然に発せられた子どもの歌声について、こどもの音域に合わせたいずれの調性でも歌うことができる技能が必要であると考えられる。

4. 研究方法（アンケート調査より）

(1) 倫理的配慮

本研究に関する調査において、園名や個人名が第三者に特定されないことがないこと、参加は自由意志であり拒否における不利益はないこと、ならびに本研究の目的と内容を参加者へ説明し口頭と書面にて同意を得た。本研究は平安女学院大学幼児教育研究センター倫理委員会での承認を得た。

なお、調査票には本研究の目的と内容、プライバシーポリシーを明記した。調査票の回収をもって調査協力への同意を得たものとする。

(2) 実施期間と対象者

実施期間：2023 年 11 月～12 月

対象者：京都府 8 校・大阪府 3 校の、保育園・幼稚園・認定こども園、計 11 校より、10 校（回収率約 90.9%）より、保育者計 52 名の回答が得られた。

(3) 調査項目内容

「保育現場における音楽活動について」に関するアンケート調査を行った。

本研究に該当する質問項目は以下の通りである（質問項目④～⑦は自由記述）。

- ① 勤務経験の種別と年数、② 年間を通して行われる音楽活動について、③ 日常多く行われる歌の活動について、④ 音楽活動でよく取り上げられる曲目について、⑤ 音楽に関して養成校でもっと学んでおきたかった内容等について、⑥ 保育者養成校に期待する音楽技能について、⑦ その他（自由記述）、以上の7項目である。

(4) アンケート調査による研究結果

アンケート調査における本研究に該当する質問項目についての研究結果は以下の通りである。

① 勤務経験の種別と年数

表1 勤務経験の種別と年数

実務年数・人数	種別等
6年未満・15名	保育園3年以内 7名/ 幼稚園3年以内 7名/ 保育園3年以内こども園3年以内 1名
6年～10年・14名	保育園5年以上10年以内 8名/ 幼稚園5年以上10年以内 3名/ こども園5年以上10年以内 3名
11年～15年・6名	保育園10年以上15年以内 1名/ 幼稚園10年以上15年以内 1名/ 子ども園10年以上15年以内 2名/ 保育園3年幼稚園12年 1名/ 保育園5年以上10年以内幼稚園3年以内 1名
16年～20年・6名	幼稚園5年以上10年以内保育園3年以内こども園3年以内 1名/ 幼稚園10年以上15年以内こども園4年 1名/ 幼稚園3年以内保育園10年以上15年以内 2名/ 幼稚園5年以上10年以内保育園5年以上10年以内29年以下 1名/ 保育園5年以上10年以内こども園5年以上10年以内30年以下 1名
21年以上・11名	保育園 3名/ 幼稚園 1名/ 幼稚園3年以内保育園3年以内こども園10年以上15年以内 1名/ 幼稚園10年以上15年以内こども園10年以上15年以内 1名/ 保育園10年以上15年以内幼稚園10年以上15年以内 1名/ 幼稚園15年以上20年以内保育園3年以内 1名/ 保育園20年以上こども園3年以内 1名/ 保育園10年以上15年以内こども園10年以上15年以内 1名

表1より、勤務年数が6年未満は全体の約29%、6年～10年は全体の約27%、11年～15年と16年～20年は全体の約11.5%、21年以上は全体の約21%という結果となった。

② 年間を通して行われる音楽活動について

図1 年間を通して行われる音楽活動

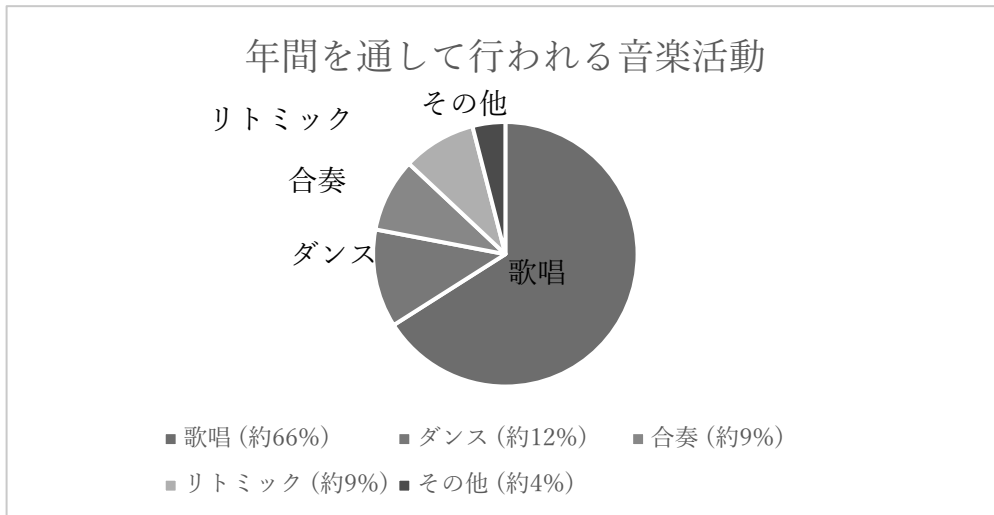


図1に示したその他の少数項目において、聖誕劇・鼓笛マーチング・CDで音楽を聴く・手作り楽器で遊ぶ・電子楽器に内蔵されている音当てクイズ・ファゴットを園児の前で先生が吹きその絵を描く、太鼓演奏・民舞・お祈りなどの活動が挙げられた。

③ 日常多く行われる歌の活動について

図2 日常多く行われる歌の活動

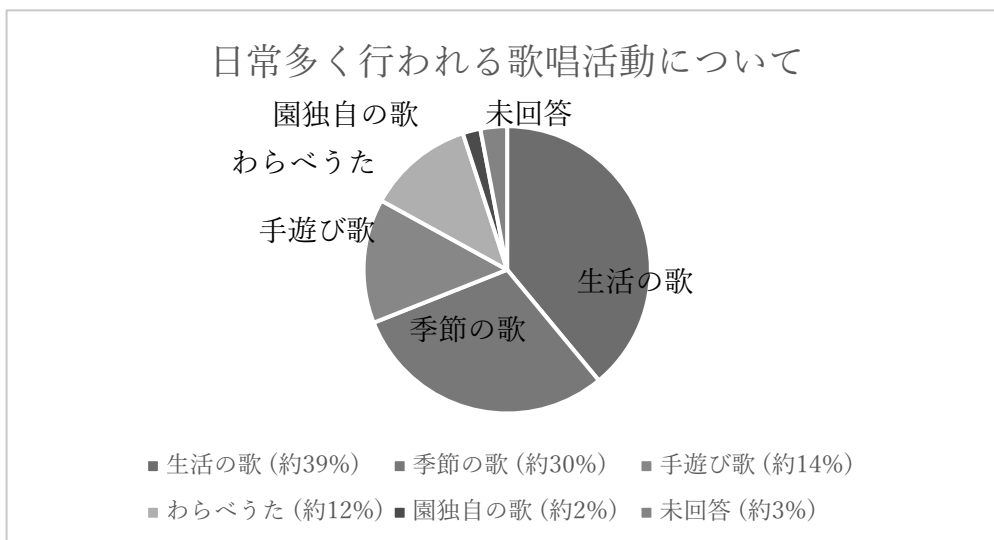


図 2 より、歌唱活動において、生活の歌・季節の歌・手遊び歌・わらべうた・園独自の歌の順に日常で多く活動されている様子が見受けられた。

④ 音楽活動でよく取り上げられる曲目について(歌に関する曲目で複数可、未回答 3 名)

表 2 音楽活動でよく取り上げられる曲目

<p>生活の歌全般→ おはようの歌、おかえりのうた、おべんとう (給食の時を含む)</p> <p>カレンダーマーチ、ジングルベル、ぶんぶんぶん、かえるのうた、にじ、ドレミの魔法、あわてんぼうのサンタクロース、ドレミの歌、きらきら星、手のひらを太陽に、虹のむこうに、ありがとうの花、名前っていいな、どんな色が好き、おもちゃのチャチャチャ、コンコンコンクシャン、はたらくくるま、どんぐりころころ、こぎつね、たきび、おたんじょう日はうれしいな、おはようクレヨン、森のファミリーレストラン、さんぽ、なかよしの歌、きんきんきれいな秋の歌、おひさまになりたい、犬のおまわりさん、ママと冷蔵庫のひみつ、パパラッパハイキング、やおやさん、くまさんくまさん、パン屋さん、アンパンマン、おべんとうばこ、カミナリどん、3びきのこぶた、むすんでひらいて、パンダうさぎコアラ、手をたたきましよう、まあるいたまご、雪だるまのチャチャチャ、大きな栗の木下で、とんとんとんとんひげじいさん (替え歌含む)、くいしんぼうのゴリラ、おはよう、りんごゴロゴロ、のぼるよのぼるよコアラ、チョキチョキダンス、おべんとバス、パン屋に5つのメロンパン、幸せなら手をたたこう、ミツヤサイダー、キャベツの中から、水てっぽう、京野菜じゃんけん、糸まき、おはなしはじまるよ、はじまるよ、こぶたがみちを、1と5でたこやきたべて、大きくなったら何になる、ピカチュー、1と1をあわせるとピノキオのお鼻になるんだよ、あたまかたひざぼん、やさいもぐーチーパー、前出してひっこめて、ミックスジュース、ピクニック、さかながはねて、天狗の花、グーチョキパーでなにつくろう、パン屋さんにおかいもの、ずっとあいこ、わにのかぞく、じゃんけん列車、よつちよれ、ほせほせ、あわぶくだった、はないちもんめ、げんこつやまのためきさん、あつぷっぷ、おもやのもちつき、にぎりぱっちり、ぺったらぺったん3、ぜんぜがのんの、ちょっとパーさん、一本橋、ぼうが一本、なべなべそこぬけ (順不同)</p>

上記の他に、以下の回答があった。

- ・年度により年齢や季節や子どもの興味に合わせる (複数回答)
- ・その年によって様々なので複数回使用しない
- ・お母さんと一緒にケロポンズなどの CD より選択
- ・月の歌
- ・幼児曲全般・アニメの歌・邦楽 (リズムの取りやすいもの)
- ・最新の J-pop

⑤ 音楽に関して養成校でもっと学んでおきたかった内容等について

本研究に該当する歌唱に関する項目について、具体的には以下の 3 つの項目について複数の回答があった。

- ・歌 (わらべうた・手遊び歌) のレパトリーを増やしておく

- ・歌詞指導の方法
- ・年齢に適した歌唱指導（発声を含む）

図3 音楽に関して養成校で学んでおきたかった内容等

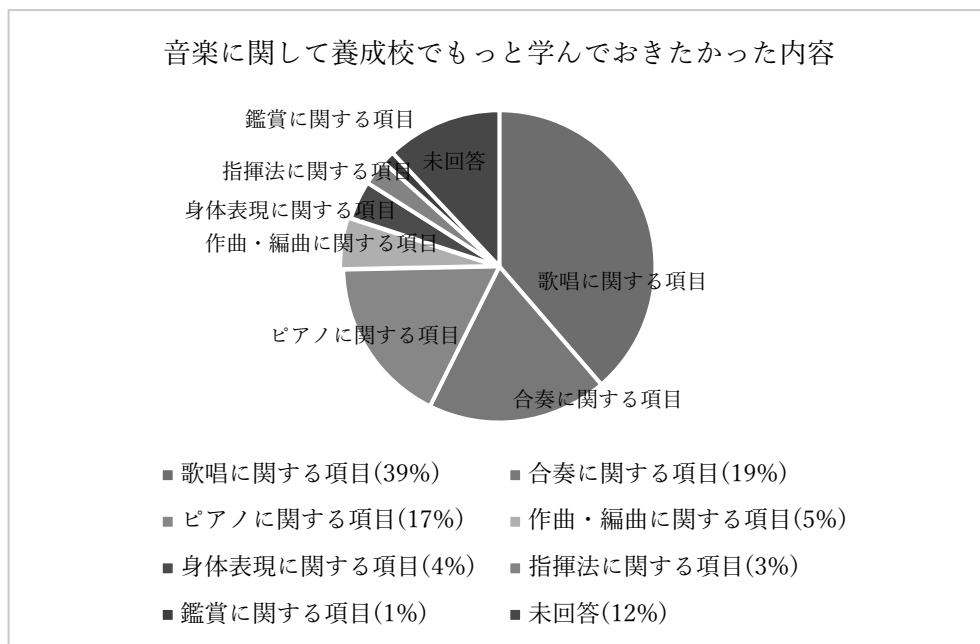


図3で示したとおり、音楽に関して養成校でもっと学んでおきたかった内容について、全体の39%となり歌唱に関する項目が一番多い結果となった。

⑥養成校に期待する音楽技能について(本研究に該当する歌唱に関する項目について)

- ・音程通り人前で歌うこと
- ・正しいリズムで歌うこと
- ・歌唱指導法
- ・発声法
- ・手遊びうた・わらべうたのレパートリーを増やしておく
- ・先歌い（リード）ができる技能
- ・ピアノが苦手でも他に変わるものを工夫（できないならどうするか工夫してほしい）
- ・手遊びや歌の効果（知識）

⑦ その他（自由記述）

- ・レパートリーを多く持つておくこと（生活の歌・手遊び歌など）

- ・音楽を楽しんで欲しい。今の流行ばかり追わず色々な歌・曲を知り、幅を広げて欲しい。以上の記述が見られた。

5. 考察

(1) 研究結果による考察

以上の研究結果について、アンケート調査の質問項目①～⑦の歌唱に関する観点より考察する。

質問項目①より、保育園や幼稚園・認定こども園、または複数の施設において11年以上の実務経験有りとの回答が全体の約44%であった。現場での経験豊富な保育者からも多くの回答をいただけたことは、現状だけでなくこれまでの音楽活動の様子や問題点も把握することができ多に役立った。

質問項目②より、音楽活動においては歌唱活動が全体の66%で最も多い結果となった。

質問項目④より、歌唱活動においては生活の歌と季節の歌を合わせて約7割を占め、園での生活の中で歌唱活動が自然に行われている様子が見受けられる。手遊び歌が約14%、わらべうたが約12%であった理由の1つとして、レパートリーの曲数の影響も推測できる。

質問項目⑤の音楽に関して養成校で学んでおきたかった内容についても歌唱に関する項目が全体の39%で最も多い結果となった。日常で最も多く歌唱活動が行われることから、歌唱に関して知識を深めたいという保育者の意向が推測できる。質問項目③④⑤の回答からも見られるように、保育者養成校在学中に保育の現場で活用されると考えられる様々な楽曲については、子どもの発達に適した選曲や保育現場の状況に合わせて歌唱活動ができるよう日頃からこどものうたに興味や関心を持ち意識を向けておくことが必要であると考えられる。

質問項目⑥⑦については、本研究に該当する歌唱についての記述を選択し示した。

以上の記述より保育者養成校において、音楽の基礎技能としてピアノを用いずに正しい音程とリズムで歌えることや、子どもの音域に合わせたいずれの調性でも歌うことができる技能が学習者に必要であると考えられる。

次に、これらの技能を鑑みた教材を検討する。

(2) 研究結果による教材研究

今泉ら(2017)¹²は、概ね3歳で「声帯の長さは5mm程度で、声域はイ音～1点イ音(図4)の1オクターブになる」、概ね5歳では「声帯の長さは6～7、8mm程度に成長し、声域はイ音～2点ハ音(図5)と広がる」と示している。

【譜例1】及び、【譜例2】は、概ね3歳と概ね5歳の音域を五線で示したものである。

【譜例 1】 概ね 3 歳の音域**【譜例 2】** 概ね 5 歳の音域

保育者養成校での歌唱指導について、吉田 (2020)¹³ は、「うたに含まれる音楽要素を意識化して学ぶことは、『音楽性の基礎となるソルフェージュ』の効果的な指導法」であると述べている。「子どものうたに含まれるソルフェージュ的要素」について楽曲に使用されている音域・音程・リズムについてまとめており、わらべうたについて、「西洋音楽の音階ではなく、日本の音階や言葉に沿っているので、歌う際の音程が把握しやすく、心理的にも負担がない。この点でわらべうたは、子どもの声域の発達に配慮したうたのレパートリーとしてだけでなく、保育者志望の学生が自然に基礎的な音程を歌う教材になる。うたを楽しく遊びながら繰り返し歌うことも可能だろう。」と述べている。

また、Forrai Katalin ら (1974)¹⁴ は、「子どもの声域に合った民謡やわらべ歌を多く選び出し、それを基に教育の内容を検討すること」と述べている。「リズムを考える最初は、拍がきちんととれるように訓練すること」とし、耳から覚え、「小学校の授業を始めるのに必要な音楽の基本的知識を身につける」と示している。

これらの先行研究も鑑み、わらべうたを用いた教材について検討する。

『ひらいた ひらいた』 (わらべうた)

音域：短 7 度、音程：完全 1 度、長 2 度、短 3 度、完全 4 度、完全 5 度

リズム：4 分音符・8 分音符・16 分音符・付点 4 分音符・4 分休符・8 分休符

【譜例 3】

ラ ラ ソ ラ ラ ソ ミ ラ ソ ラ シ ラ ラ ソ ミ
 シ シ レ シ ラ シ ラ ソ ソ ラ

【譜例 4】

ラ ラ ソ ラ ラ ソ ミ ラ ソ ラ シ ラ ラ ソ ミ
 シ シ レ シ ラ シ ラ ソ ソ ラ

わらべうたは人から人へ歌い伝えられた伝承歌であるが、本稿では五線による記譜で、【譜例 3】【譜例 4】のように示した。子どもが自然に楽しく歌うためには、保育者は子どもの声域に適合する音の高さを選ぶことが大切である。つまり保育者は、どのような音程であれば子どもが歌いやすいのかを常に考えておく必要がある。そのためには移調の知識を要すると考える。【譜例 4】は移動ドによる階名で表記した。【譜例 2】のように、移調は他の音から初めても音程関係はそのまま保たなければならない。つまり、相対的な各音前後の音程関係は変わらない。コダーイが提唱しているように、音高を正確に認識するためには移動ド唱法も必要である。そのため移調をする手順として、原曲の音階音度を調べ、移調したい音階音度書き換える必要がある。

表 3 音程と鍵盤の数の関係

旋律音【譜例 1】	ラーラ	ラーソ	ソーラ	ラーラ	ラーソ	ソーミ
旋律音【譜例 2】						
固定ドによる階名	ファ#ーファ#	ファ#ーミ	ミーファ#	ファ#ーファ#	ファ#ーミ	ミード#
音階音度	完全 1 度	長 2 度	長 2 度	完全 1 度	長 2 度	短 3 度
鍵盤の数	1	3	3	1	3	4

以上の方法は、音程の違いを自分の耳で体験しながら練習を始めることができると考える。開始音を変えて自然に繰り返し練習することが可能であり、自分の声や音を丁寧に聴くことができる。音程の違いにも自分で気づき、修正をしながら正しい音程で練習ができることにつながっていくと予測できる。

自分自身で選んだ音から開始することにより、まず自分自身が歌いやすい高さであるかを気付くことにつながり、このことは子どもの音域にも意識を向けることができると考える。また、音の間違いに気付くことはピアノの練習の際にも役立つと考えられる。

今泉ら (2017)¹⁵は、「子どもの音楽的表現の発達」において、1 歳半頃には「いくつかの文節を歌い、好きな曲を繰り返し歌う」、2 歳頃には「歌の旋律を全部、または部分的に知って歌う」3 歳頃には「簡単な音の調子に合わせ始め」、「歌の初めから終わりまで歌えるようになる」と示している。3 歳頃には「旋律をはっきりと認識」することができて、5 歳頃には「短い旋律を正しく歌える」と示している。

子どもが自然に歌い始めた際に、保育者が子どもの声の高さで続いて一緒に歌えることは、子どもが声を合わせて歌う楽しみを経験することにつながると考える。

保育者自身の耳も育むことも重要であると考えられる。

6. まとめと今後の課題

子どもとの関わりの中で、子どもの「耳」を育むだけでなく、子どものうたを聴く保育者の「耳」も子どもの音楽的発達へと繋ぐことができる重要な要素であると考え。遊びの中から子どもたちの歌声を保育者が正確に聴くことは、子どもが丁寧に歌う習慣を身につかせ、音楽への興味や関心など内的な要求も育むことができると推測できる。

Forrai Katalin ら (1974)¹⁶ は、子どもの音楽教育を始める時期は「誕生日前9ヶ月」で「音楽教育は、早くはじめなければならない」と示している。幼児期における音楽教育がいかに重要であるかが読み取れる。子どもたちと一緒に毎日の生活や遊びの中で楽しく歌うだけでなく模範となる歌唱の技能が保育者にも必要である。

「聴く」ことについて幼児期にこそ育まれるものがあると考えられるのであれば、その可能性の機会を子どもに与えることが幼児教育に大切なことであり、保育者の役割であると考え。

本稿では、ピアノの技術や合奏に関する回答については述べていない。本研究は、歌唱に関する基礎の入り口とも言える教材研究であり、今後さらなる展開を試みたい。また、歌唱指導で提案した内容を授業等で実践しその結果を報告すること、アンケートでも記されたピアノ技術や合奏に関する効果的な教材研究を検討することを引き続き行いたい。

謝辞

本研究に使用したアンケート調査について、京都府8校・大阪府3校の、保育園・幼稚園・認定こども園の先生方にご協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。

注

- 1 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 pp.233-247
- 2 (同掲1) pp.90-93.
- 3 佐野美奈・佐橋由美・田谷千江子 (2019) 『乳幼児のための保育内容表現 身体・音楽・造形』ナカニシヤ出版 p.32,p.77
- 4 Forrai Katalin・Szönyi Erzsebet (1974) 羽仁協子・谷本一之・中川弘一郎共訳『コダーイ・システムとは何か ハンガリー音楽教育の理論と実践』全音楽譜出版社 pp.60
- 5 加藤明代・森広樹・平野浩由 (2022) 「保育現場における音楽表現活動の実態についての一考察 —歌唱の取り組みにおいて—」常葉大学短期大学部紀要 53号 pp.55-71
- 6 小澤知恵 (2009) 「保育所・幼稚園実習で求められる音楽活動の考察 —「生活の歌」と「季節の歌」について—」埼玉純真短期大学研究論文集 第2号 pp.37-47

- 7 高地誠子・伊藤久恵・杉田素子・結束麻紀・吉田めぐ（2022）「保育士・幼稚園教諭養成のための音楽実技科目におけるレパトリーリストの作成 —実習園の音楽活動実態調査より—」未来の保育と教育 東京未来大学保育・教職センター紀要 第9号 pp.17-26
- 8 松下伸也（2023）「保育士・幼稚園教諭養成のための大学授業の一考察 —音楽基礎能力の向上と創造性を育むために—」愛知淑徳大学論集 福祉貢献学部篇 第13号 pp.54-60
- 9 厚生労働省編（2018）『保育所保育指針解説』フレーベル館 pp.274
- 10 乳幼児保育研究会（2013）『続発達がわかれば子どもが見える』株式会社ぎょうせい p.18
- 11（同掲3） pp.46-47,
- 12 今泉明美・有村さやか編著 望月たけ美・宮川萬寿美・東元りか・高地誠子著（2017）『子どものための音楽表現技術』萌文書林 pp.128-130
- 13 吉田直子（2020）「子どものうたの音楽分析 —保育者養成校のソルフェージュ指導の視点から—」帝塚山大学教育学部紀要 第2号 pp.50-59
- 14（同掲4） pp.60-61
- 15（同掲12） pp.127-130
- 16（同掲4） pp.8-9